

孫文

1. 事業実施の目的

- 博士論文執筆のための予備調査として、1) 調査地の文献資料調査、収集。
- 2) 調査地黒水県の近状を把握する。

2. 実施場所

四川省成都市、四川省アバ州馬爾康市、四川省アバ州黒水県、四川省アバ州茂県

3. 実施期日

2019年6月1日(土)～2019年7月29日(月)

4. 成果報告

●事業の概要

申請者は、博士論文執筆の為の予備調査を実施した。文献資料調査、収集という目的で四川省成都市の大学と研究機関および四川省アバ州馬爾康市と黒水県の政府機関を訪問した。黒水県の近年の変化を把握するために、黒水県と茂県の村落で現地調査を行った。成都市には6月1日から6月8日までの8日間、馬爾康市には6月9日から6月16日までの8日間、黒水県には6月17日から7月28日までの44日間滞在した。合計の滞在数60日間である。

2019年6月2日から2019年6月8日まで、成都市の四川省民族研究所と西南民族大学で資料の調査を行った。四川民族研究所の袁曉文所長と王海燕副研究員に面会し、近年四川省内の「蔵羌彝走廊」に関する研究状況を確認した。特に、昨年羌語調査を参与した王海燕副研究員によれば、近年黒水県のチベット族の民族意識が高揚したため、過去には羌語北部方言の中心地であった黒水県でも、現在は言語の帰属問題は敏感な政治問題となっているという。この現象を、黒水県における言語帰属の反発「運動」と呼ぶことができる。西南民族大学西南少数民族研究センターの蔣斌教授と楊正文教授に面会し、今回の資料収集と調査の着眼点に関してアドバイスももらった。蔣斌教授の指示により、アバ州政府所在地馬爾康へ資料調査に行くことにした。

2019年6月9日から6月16日まで、馬爾康市の各政府機関で資料の調査、収集を行った。主な関心は、近年出版された歴史文献と開発計画の書類である。この期間、アバ州博物館を訪問し、館長との面談を通じて、黒水県における考古学の成果と地域間の歴史的関係性を再認識した。

2019年6月17日から6月23日まで、黒水県の各政府機関で資料の調査、収集を行い、地方有力者を訪れて面談した。その相手は、地元の政府機関の官僚、新しいメディアの経営者、学者などである。4年前の修士論文調査の時と比べると、経済開発の向上とともに、特に文化観光において、黒水県と周辺の羌族の県の間で文化資源の帰属と真実性をめぐる論争が盛んになっていた。黒水県の有力者たちは、黒水県をギャロンチベット族の観光地と宣伝する一方で、具体的な飲食、祭日、住居、服装などの文化要素に関しては、先に観光産業を起こした隣県の茂県の方法に異議を唱え、いわゆる羌族の文化を黒水県のチベット文化として誤って解釈していると批

判している。より普遍的な意見として、黒水県の言語は羌語ではなく、チベット語であるとする立場がある。4年前に僅かに少数のエリートがこれらの問題を検討していたが、この意識が広まった理由を、さらに調査する価値があると思われる。

2019年6月24日から6月26日まで、黒水県沙石多鎮の観光開発の現状を調査した。沙石多鎮では、2010年からの「特色鎮」の開発計画により、羊茸村、昌徳村という二つの村の観光開発が始まった。2008年の震災前に、この二つの村は高山の半農半牧の生業で送っていたが、震災後に全村、川谷の平地へ移転した。2010年からの観光開発により、村民たちがチベット式の民宿を経営したり、観光産業に従事したりすることで、今までの生活基盤である農耕栽培を止めた。その一方、出稼ぎの人数が益々増加してきた。両村が「雅克夏国家森林公园」の範囲の内部にあるため、そして1935年紅軍の長征の革命聖地として、自然観光、民族観光、革命聖地巡礼観光という三つの要素をもつ、四川省でも人気の観光地となった。

2019年6月27日から6月29日まで、沙石多鎮の高山部の銀真村に訪れ、観光開発の状況下高山部の村の生活状況を把握した。銀真村は標高3500メートルの高山部にある。震災後、標高2500メートルの川谷の平地で家屋を新築したが、高山部の半農半牧の生活も続けている。全村は18世帯だけだが、今年から「中国伝統村落リスト」に入った。それにより今後、どのような影響が出るか興味深い。

2019年6月30日から7月3日まで、修士論文の調査地である布多村に再訪し、近年の変化を調査した。驚いたのは、今の布多村では、農耕栽培に従事している村民が益々少なくなっているということである。村民は、労働投入に見合った生産が得られず、青年が農業に興味をもたないと言っていた。そして、政府の開発計画により、多数の村民は、漢方薬大黃を栽培するために外来の漢方薬会社に土地を賃貸している。支援計画として、村民たちが会社に雇われて漢方薬栽培を管理する。変わらないのは、村民たちはが4年前と同じように季節的な出稼ぎに従事しているということである。

2019年7月4日から7月8日まで、黒水県東部の石碣楼鎮丁寨村で都市部への移民の状況を調査した。丁寨村に初めて来たのは2010年である。あの時から、一部の人々は近くの茂県や成都平原の都江堰市に移住し始めた。今回の調査までに、全村108世帯の中で半分以上の世帯が村外に移住していた（都江堰市へは40世帯、茂県への移住世帯数は不明）。移住先で、村落の協会ができ、定期的な集まりを開催したり、冠婚葬祭の儀礼を組織したりすることがある。移住先の村落組織の再構築は今回の調査の重点の一つだと思われる。

2019年7月9日から7月14日まで、高山部の瓦鉢鎮で貧困削減計画の審査を見学した。瓦鉢鎮は黒水県の東南部にあって、茂県と境界を接している。ギャロンチベット族の宗教史によれば、従来のチベット仏教の寺院体系が管理した最東端の地域であったと言われている。今回瓦鉢鎮に滞在した8日間には、政府の貧困削減計画の評価の現場に居合わせた。郷政府の役人たちと一緒に瓦鉢鎮の二つの村の計20の貧困世帯を訪問した。こうして貧困削減計画の実施の概要を把握した。この期間、黒水県の境界に隣接する茂県の雅都鎮（羌族地方）を訪れた。両地の人々は、もともと自然空間と文化習慣、および民族的アイデンティティを共有していたはずだが、現在は、

黒水県側でチベット意識が高揚し、経済開発の選択、生活習慣、エスニシティなど^①面で、異なる進路に進んでいる。

2019年7月15日から7月19日まで、黒水県麻窩郷の木日窩村と扎苦村で、出稼ぎの状況を調査した。麻窩郷の人々は黒水県で一番早く漢族の都市部に雑貨露店を出した。清の時代の四川省の地方誌では、岷江上流の羌族やチベット族が農閑期に成都平原へ漢方薬や動物毛皮を販売したことを記録している。1980年代の改革開放初期から、この商売も蘇った。麻窩郷の人々は、黒水川の南は北斜面で日当たりが悪く、土地が狭く、生産性も低いため、外部に稼ぎなければならないと言っていた。従来の出稼ぎは農閑期に限られていたが、農業生産活動の減少にしたがって、今では出稼ぎが常態化し、地元に戻るのはほぼ夏の季節である。その理由は、出稼ぎ先の暑さをさけること、および夏の山祭りに参加することだと言われている。この二つの村では、ほぼ出稼ぎで家庭収入を得るとのことである。実は、黒水県の統計では、約六万人の人口のうち、約二万人が出稼ぎに従事しているとされている。博士論文の扱う黒水チベット族のエスニシティ問題を考察するにあたって、出稼ぎ先と出稼ぎ方式による影響は、重要な着眼点である。

2019年7月20日から21日まで、県政府所在地の芦花鎮の日多村で、漢方薬の栽培の状況を調査した。上記の布多村の漢方薬の栽培とは違い、日多村の漢方薬の栽培は政府が主催したモデル事業である。政府の官僚の話しからこのことを知った。政府が強く介入しているため、村民たちの参加の程度、収入の増加などは、見た目では、宣伝通り順調である。しかし公平性、リスク、持続可能性、政府の役割に関する村落内部の視点は再検討する必要があると思われる。

2019年7月23日から7月26日まで、沙石多鎮の三达谷村で観光開発の状況を調査した。夏の観光最盛期であったため、もう一度沙石多鎮へ戻り、氷河観光の起点である三达谷村に訪問した。黒水県の看板観光地としての达谷氷河は、今では成都平原の都市部の人々の人気観光地になっている。三达谷村は、黒水県では数少ないアムド・チベット語が話される村である。彼らと、一般の羌語を話す黒水チベット族との違いは何か、今の開発状況で二つの集団がどのような関係を保っているのか、エスニックアイデンティティと言語のズレがどのように二つの集団に影響しているか、これらの問題は、今回の調査前から考えていたことであるが、今回の調査と地方有力者との交流を通じて、民族帰属の問題が益々台頭してきたように思われる。特に観光開発の宣伝のため、黒水チベット族のアイデンティティと歴史、文化の特殊性を強調する傾向が強まっている。

今回の調査は、予備調査として、黒水県の近年の変化を全般的に把握した。4年前の調査と比べると、人々が農業生産活動を止める傾向が顕著である。出稼ぎと都市部への移民者も大幅に増えできた。地方有力者との面談によれば、民族文化を売り物にする観光開発において、隣県の茂県の羌族との競争が顕在化し、特に観光開発に用いる文化要素に関して、茂県のやり方を批判する意見が出ている。資料収集の面では、今回の調査により、黒水県の歴史、宗教、政府統計資料、開発計画などに関する合計27冊の本を入手した。今回の予備調査により黒水県の近況を把握できたので、指導教員の意見を参考に、来年の調査計画を再検討するつもりである。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査は博士論文研究の予備調査であり、黒水県の近年の変化と現状を全般的に把握した。

1) 4年前の調査と比べると、農業生産活動を止めた人々が増加していることが目立つ。そして、出稼ぎと都市部への移民の人数も大幅に増えてきた。このことから黒水チベット族の生業を観察する際の着眼点を再考する必要がある。民族誌として従来の半農半牧の生業形態を描写しながら、近年の変化と民族地域の開発との関係を考察する。すなわち、より人々の現実的な判断と選択に関心を寄せたい。

2) 地方有力者との面談と現地調査の結果により、民族アイデンティティを提示する文化観光において、隣県の茂県の羌族との競争が顕在化し、特に観光開発に用いる文化要素に関して、茂県のやり方を批判する意見が聞かれた。それに対して、政府が主催した文化活動、普通の民衆のいわゆるチベット式の生活方式（飲食、服装など）、宗教信仰などの面では、チベット族の身分の再構築と強化の傾向が認められた。

3) 今回の調査により、黒水県の西から東までの11箇所の村に訪問したことで、来年の長期調査の調査地をほぼ明確にすることができた。そして、政府の官僚や地元の村民たちと良い信頼関係を築くことができた。

4) 資料収集の面では、今回の調査により、黒水県の歴史、宗教、政府統計資料、開発計画などに関する合計27冊の本を入手した。

今回の予備調査により、黒水県の近況を把握できたので、指導教員の意見を参考に、来年の調査計画を再検討するつもりである。

●本事業について

今回の予備調査は、4年ぶりに黒水県へ再訪したことである。中国の民族地方の激しい変化を十分に感じた。自分にとって人類学の長期的観察の意味を再考するきっかけとなった。出発前に、指導教員から指導と激励を受け、本調査を完成することができた。

本事業を活用することで、自分の研究の具体的な着眼点と問題意識をより明確にすることができた。本事業がなければ、研究活動を継続することは難しかったため、本事業には感謝したい。申請者は、これからも、本事業が継続して実施されることを希望する。